

## 菊池重三郎と馬籠

伊藤 匠  
(当館学芸員 (臨時職員))

### 1. はじめに

昭和18年(1943年)8月22日、明治・大正・昭和にかけて文壇で活躍し、『夜明け前』など名著を手掛けた島崎藤村が、大磯町台町にある邸宅にて亡くなった。

藤村邸の近くである大磯町山王町に住んでいた菊池重三郎は、島崎家に頼まれ藤村の葬式の会計係を務めることになった。加えて、地元大磯に詳しいことから、会計以外の事務手続きから来客の対応まで不眠不休で取り組んだ。

24日午前9時出棺。大磯町の地福寺にて、藤村の遺言通り土葬による葬式が営まれた。その様子は「ひつそりと、ものものしさから遠かった」という<sup>(1)</sup>。

同日午後3時、大磯での葬式が終わり、菊池は藤村邸に戻って一息ついた。そして、八畳の茶の間にひっくり返り、「…馬籠に行ってみようかな。」とフツと浮かんだのであった<sup>(2)</sup>。

菊池重三郎(明治34年～昭和57年)は宮崎県出身の作家、翻訳家である。昭和5年より新潮社などに勤務するかたわら文筆活動を行い、昭和6年には『欧羅巴物語』、昭和15年には訳書『パンビの歌』などを発表する。菊池が大磯に移住したのは昭和10年のことであった。

昭和16年1月16日、藤村が大磯の左義長の祭りの見物を希望したため、菊池がその宿を斡旋した。それをきっかけとして、藤村は大磯への移住を考えるようになった。

ある日、菊池は藤村から大磯の空き家探しを頼まれた。そこで、大磯在住で藤村の古い馴染みである天明愛吉と共に空き別荘を見繕い、2月中には入居できるよう準備を進めた。

入居後、藤村はしばらく東京と大磯を往復していたが、やがて大磯に落ち着いた。そして、『東方の門』第三章の執筆途中、藤村は永い「休息」に入るのであった<sup>(3)</sup>。

藤村の葬式は都合三度行われた。一度目は大磯地福寺での葬式である。二度目は東京青山斎場での告別式である。

三度目が藤村の故郷である馬籠の永昌寺にて、昭和18年10月9日に行われた遺髪埋葬式である。この遺髪埋葬式に参加するべく、菊池は初めて馬籠を訪れたのであった。

以上の経緯が、菊池と馬籠の関係のはじまりである。その後、戦時疎開を経て、菊池は馬籠の人々と交友を深め、ふるさと友の会の発足や藤村記念堂の建設にも携わっていくことになる。

このように、菊池は馬籠における島崎藤村記念事業の中心的な役割を果たした人物であり、同時に戦後間もない頃の馬籠の町おこしに寄与した人物であった。

また、作家として、『馬籠』(東京出版株式会社、1946年)と『木曾馬籠』(小山書店新社、1958年)を刊行し、馬籠の名を日本全国に知らしめた点でも評価されるべき人物である。

『馬籠』は島崎藤村の葬式から、戦時疎開中の馬籠での生活を描いた著作である。『木曾馬籠』は、『馬籠』と同様に、島崎藤村の葬式から始まるが、代わって、藤村記念事業への取り組みを中心に、藤村記念堂の建設までを取り上げた著作である。

さて、大磯町郷土資料館には、寄託資料として菊池重三郎関係資料が1,510点現存している。その中には、馬籠での藤村記念事業に係る資料もあれば、『馬籠』や『木曾馬籠』の執筆に係る資料もある。

そこで、本稿では、大磯町郷土資料館の寄託資料である菊池重三郎関係資料の紹介を行いつつ、『馬籠』や『木曾馬籠』の記述を参照して、菊池と馬籠の関係を考察する。

### 2. 馬籠での生活

馬籠は岐阜県中津川市に所在する旧中山道の宿場町である。中山道六十九次の内、1番の板橋宿より数えて馬籠宿は43番目に当たる。なお、42番目が妻籠宿、44番目が落合宿である。

明治初期より長野県西筑摩郡神坂村に属し、昭和33年からは同郡山口村に属する。昭和43年に長野県木曾郡山口村と改称、平成17年(2005年)に山口村は越県合併により岐阜県中津川市に編入されることになる。

馬籠を通る旧中山道は北東から南西へと伸びる坂道である。途中、桁形によって道が屈曲しているため直線ではないものの、坂下の馬籠バス停から坂上の陣場(見晴台)までの直線距離は大体600m程度となっている<sup>(4)</sup>。

藤村とその家族が眠る永昌寺は、馬籠集落の北側少しはずれにある。藤村記念館は、旧中山道沿いに軒を連ねる馬籠集落の中腹程度、島崎家が住んでいた旧本陣屋敷の跡地にある。

島崎家は本陣・庄屋・問屋の三役を兼ねていた旧家であった。島崎春樹(藤村)は島崎家17代当主正樹の末子として明治5年(1872年)に誕生した。藤村は旧本陣屋敷にて育ち、明治14年、勉学のため東京へ移住する。

明治28年、馬籠に大火が発生し、旧本陣屋敷は隠居所を残して焼失してしまう。この隠居所が、藤村が幼年の頃に過ごした勉強部屋であり、菊池重三

郎が昭和20年4月1日より戦時疎開として、家族とともに寄寓した場所である。

隠居所の間取りは三畳と八畳の中二階である。西向きに明るく、障子を開ければ本陣跡を見下ろす位置にあり、恵那山、梵天山、永昌寺の森、遠くは美濃の山々を展望できる<sup>(5)</sup>。

当時、旧本陣屋敷の跡地は大黒屋（藤村記念館の右隣り）の畑地となっていた。菊池が疎開した時には野菜の他、柿、なつめ、梅、海棠、柘榴などが植えられていた。

旧本陣屋敷跡の左隣りは藤村の長男楠雄が居住していた緑屋（現在は四方木屋）である。藤村の遺髪埋葬式の日、菊池は緑屋の写真を用いた絵葉書を娘に送っている<sup>(6)</sup>。

『馬籠』や『木曾馬籠』には、隠居所を舞台とする数々のエピソードが掲載されている。菊池が、藤村の『初恋』の相手であるおゆふさま（妻籠宿の奥屋林六郎の母、出身が大黒屋）と会った話、大黒屋の土蔵と当主大脇文平の話、鈴木儀助に酒を求められる話等である。

また、隠居所には大きな井戸が設置されている。菊池は隠居所に寄寓している間、炊事洗面のために井戸を利用した。この井戸共々、隠居所は現在も残っており観覧することができる。

### 3. 『馬籠』について

藤村の遺髪埋葬式が行われた昭和18年10月9日より、『馬籠』が刊行される昭和21年まで、菊池は合計18回大磯と馬籠を往復している。さらに、馬籠滞在中に岐阜県や愛知県に旅行した回数も含めれば、往復回数は二十数回にも及ぶとしている<sup>(7)</sup>。

当時、馬籠にはバスが通っておらず、馬籠に行くためには落合川駅から歩くか、三留野駅（現在の南木曾駅）から妻籠宿を経由して歩いて行く他無かった。

昭和20年4月1日からは太平洋戦争の疎開のため、家族とともに馬籠にほとんど移住する形になる。この疎開は終戦後もしばらく続き、菊池家が大磯に帰ってくるのは昭和22年になる。

『馬籠』は、菊池の第15回目の馬籠行きまでの出来事に関する新聞や雑誌に掲載した著述を集成したものである。そのため、藤村記念館に関する記述は掲載されていない。

『馬籠』執筆の経過については、菊池重三郎関係資料からある程度考察することができる。

まず、『馬籠』に4番目の話として収録されている「夕ばえ」については、昭和20年4月中旬頃に執筆を開始したことが明らかである<sup>(8)</sup>。菊池は「夕ばえ」を馬籠に関する著作の2番目に執筆した作品としている。執筆の時期と『馬籠』の掲載順は必

ずしも一致しないことが分かる。なお、「夕ばえ」は5月上旬に完成した<sup>(9)</sup>。

また、『馬籠』の8番目の話である「獵人日記」については、東京出版株式会社の編集長野田宇太郎からの書簡によって、昭和21年2月頃に書かれた話であることが分かる<sup>(10)</sup>。

書簡にて、野田は「獵人日記」が届き「さっそく通読、一人にこにこと笑ってしまっ」たことを菊池に伝えている。「獵人日記」は東京出版社の雑誌『芸林間歩』に掲載された。

野田は菊池の良き理解者であった。菊池が馬籠に関する執筆活動に賛同し、「『馬籠』の続行鶴首いたしてみます。まだかまだかと。」『馬籠』も早く出版したいものです。」などと期待を込めて書簡を送っている<sup>(11)</sup>。

『馬籠』は昭和21年11月15日に刊行されるのであるが、その前日の11月14日に定価や発行部数について書簡が届いている<sup>(12)</sup>。この書簡によれば、『馬籠』の定価は27円で発行部数は7000部となっている。その内、50部は菊池に発送し、200部は馬籠の末木利一に発送している<sup>(13)</sup>。

末木利一は、馬籠の坂上にある上扇屋（陣場扇屋）の主人である。菊池が初めて馬籠を訪れた際、末木に落合川駅から案内され上扇屋に宿泊している。

『馬籠』の装幀は画家の鈴木保徳が作成した。鈴木は『馬籠』だけでなく、菊池の他の著作、昭和5年の『欧羅巴物語』などの装幀も手掛けた人物である。昭和21年8月17日付のはがきより、菊池が指定した色を用いて鈴木が装幀を作成したことが分かる<sup>(14)</sup>。

この『馬籠』の感想について、菊池の友人知人からいくつか手紙が届いている。画家の曾宮一念は『馬籠』を読み、かつて訪れた「あの辺の景色をはっきりと浮んで来ました。」と感想を述べている<sup>(15)</sup>。

このように『馬籠』を読み、お礼の手紙を送った人物は曾宮だけではなく、先述の鈴木保徳や作家の中勘助などもそうである。

こうして菊池は藤村の縁を通じて、馬籠を幾度となく訪れ、その体験を文字に起こしていくことで、徐々に馬籠との関係を深めていった。

### 4. 藤村記念堂について

藤村記念堂の建設の過程については、菊池の『木曾馬籠』の他、藤村記念郷編『藤村記念館五十年誌』（1997年）に詳しい。

また、『木曾馬籠』とは別に、菊池は『藤村記念堂由来記抄』（ふるさと友の会、発行年不詳）を執筆し、馬籠への道案内もしている。

菊池重三郎関係資料中、藤村記念堂の建設に関してまず注目すべき資料は、建築家谷口吉郎が作成し

た藤村記念堂の各種設計図であろう。

谷口は藤村記念堂の設計図を作成するため、昭和22年3月に馬籠を訪れて、日本陣跡を実測した。谷口らが作成した設計図は「敷地配置図」「表門及塀詳細図」「記念館平面図及立面図」「正面土塀・室内展開図及屋根伏図」「記念館詳細図」の5枚である<sup>(16)</sup>。

菊池と谷口は、野田宇太郎を介して知遇を得ていた。馬籠にて藤村記念事業の機運が高まると、昭和21年9月に、菊池はその事業内容について谷口と相談している。谷口は菊池から事業内容を聞いて「喜んでお供申したいと存じます。」と快諾している<sup>(17)</sup>。

また、藤村記念堂の建設事業は、地元の有志の協力があったこそその事業であった。

『木曾馬籠』によれば、昭和21年の秋の暮、大磯へと引き上げる数日前、菊池は鈴木儀助と原穰に呼ばれて「何か一つ善いことを、やろまいか」と持ち掛けられたのが、始まりであったとしている。

馬籠には、かねてより島崎藤村を記念する事業をやろうという動きがあった。ただ、意見紛々して中心になる人物もおらず、また、資金も集まらずにうやむやになっていたのである。

そこで、鈴木たちは疎開中の菊池に意見を求めたが、菊池は記念事業を行うことは容易でないと説いた。敗戦後で物資も乏しく、また、記念事業として何かを建てるにしても人数を集められないのではないかという危惧からである。

すると、鈴木は「俺たち仲間が、ひとたび立ち上がったら、何でも、やれんということはないぞなし！」と「大言壮語ともいふべき言葉を」発したのである<sup>(18)</sup>。

菊池はこの言葉に突き動かされ、大磯に帰宅して早々、年末に記念事業の具体的な設計について相談するべく馬籠に舞い戻ったのである。

ちなみに、当事者である鈴木儀助は後年この時のことを回顧して次のように述べている<sup>(19)</sup>。

それは、菊池と鈴木と原の3人で囲炉裏を囲って酒を飲んでいた時のことである。菊池が突然体を起こして、「こうやって毎日毎日、酒飲んでぐだぐだしていてもダチカン。一つどうだい、何か後の世の記念になるような事をやろまいか」と言い放った。

鈴木と原は菊池が言わんとしていることが呑み込めなかったが、酒の勢いも手伝って口々に「やろまいか」と賛同したという次第であった。

鈴木たちが持ち掛けたのか、それとも菊池が持ち掛けたのか、とにかく、敗戦後の暗い社会情勢の中で「何か一つ善いことを、やろまいか」を合言葉に、彼らは藤村記念事業に乗り出すのである。

そして、馬籠の有志が集まり、藤村記念事業の達成を期してふるさと友の会が発足することになる。

昭和22年2月17日、島崎藤村の誕生日と結び付けて、日本陣屋敷跡でふるさと友の会の発会式が執り行われた。

菊池重三郎関係資料中のふるさと友の会の説明書きには、藤村記念事業として、「一、馬籠本陣跡の浄化、二、野外劇場の設立、三、記念講堂、四、記念宿舎」を掲げている<sup>(20)</sup>。また、この説明書きには、発起人である菊池と谷口の他、地元の有志97名、賛助員21名、特別賛助員11名が記されている。さらに、追加の賛助員がメモされており、ふるさと友の会がいかにかに多大な援助を受けて立ち上がったのかを物語っている。

特別賛助員には、有島生馬や佐藤春夫など文芸界の著名人や、後に島崎藤村像を作成する石井鶴三、同じく藤村の肖像画を描いた高島達四郎が名を連ねている。また、新潮社や東京出版株式会社といった企業も見受けられる。

昭和22年11月15日、藤村記念堂の落成式が行われた。『木曾馬籠』には、落成式当日の様子について、菊池自身ではなく、参加者の有島生馬の文を引用している。なお、菊池はこの時の有島の文章を筆写しており、その原稿が現存している<sup>(21)</sup>。

ふるさと友の会は昭和25年に財団法人藤村記念郷と名称及び体制を変えている。因みに、昭和26年には菊池宛に藤村記念郷の顧問就任依頼が届いている<sup>(22)</sup>。

また、藤村記念堂はその後施設の拡張を経て昭和27年に藤村記念館と改称し、現在に至っている。

## 5. 『木曾馬籠』について

『木曾馬籠』は藤村の葬儀より、ふるさと友の会の発足、藤村記念堂の建設、後日談をまとめた著作である。なお、『馬籠』とは異なり、菊池の直筆原稿が菊池重三郎関係資料として現存している<sup>(23)</sup>。

『木曾馬籠』が出版されたのは、落成式から11年後の昭和33年である。それだけ期間が開いた理由について、戦時中に馬籠の隠居所で生まれた子供の看病に奔走したため、「他を顧みる余力がなかったから」と「あとがき」で説明している<sup>(24)</sup>。

なお、菊池の日記から『木曾馬籠』の執筆経緯をうかがい知ることが出来る<sup>(25)</sup>。

昭和33年9月末より、『木曾馬籠』執筆に関する話が出始める。10月に入ると馬籠の現況調査や『馬籠』を読み返すなどしている。

11月7日、小山書店の小山久二郎と『木曾馬籠』について話がついた。日記によれば、小山久二郎は、藤村から三男翁助を託された人物とのことで、『木曾馬籠』の執筆についても「話のわかりも早」かったという。

それから、『木曾馬籠』執筆のため、谷口吉郎か

ら写真を提供してもらおうなど材料を集めつつ、小山書店と打ち合わせを重ね、12月6日に『木曾馬籠』は完成した。

『木曾馬籠』の序文は、獅子文六こと岩田豊雄が執筆した。序文の執筆時期は昭和41年なので、『木曾馬籠』の初版には掲載されていない。菊池重三郎関係資料に獅子文六の直筆原稿と菊池の筆写原稿が現存している<sup>(26)</sup>。

上梓した『木曾馬籠』は藤村記念堂の関係者や菊池と日ごろ親交のある人たちへ配られた。谷口吉郎もその一人である。谷口は『木曾馬籠』を読んだ感想として次のように述べている<sup>(27)</sup>。

「文中、登場人物の言葉のはしはしに、本人の表情がありありと私の目に浮かんできて、まるで、映画の大写しを見ているように感じました。戦後のあのきびしい時に、よくもあんなにいい仕事のできたものだと、今も、一種の響きを覚えるほどです。」

谷口の他にも、藤村記念堂の関係者として高島達四郎などから手紙が届いている。また、画家の東山魁夷、山口蓬春、作家の網野菊、英文学者の福原麟太郎などからも書簡が届いている。

## 6. おわりに

『木曾馬籠』の執筆は、菊池の馬籠との交流の再開でもあった。刊行後、菊池は頻りに馬籠など木曾路を訪れ取材を行った。そして、『木曾路の旅』(昭和42年)、『木曾妻籠』(昭和47年)を、それぞれ発表している。

昭和50年、菊池は脳溢血のため3年間の入院生活を送ることになる。退院後、菊池が足を運んだのは、故郷宮崎の曾木と馬籠である<sup>(28)</sup>。

昭和21年、藤村記念事業を成し遂げるために立ち上がった馬籠の有志達も、この時には菊池に負けず劣らず高齢となっていた。菊池は彼らを訪ねて昔語りには花を咲かせたのだろう、談笑する様子が写真に残っている<sup>(29)</sup>。馬籠は菊池の第二のふるさとになっていたのである。

最後に、本文で触れられなかった資料をいくつか紹介したい。

1つ目は、藤村の妻島崎静子からの書簡である<sup>(30)</sup>。藤村の死後、島崎家は箱根にある知人の別荘に疎開しており、大磯にある邸宅は無人になっていた。そのことを憂慮した島崎静子は大磯町長と相談して、大磯の邸宅の管理を菊池にお願いしたのである。

書簡中、「主人最後の書齋もいかなる運命に今後なります事か、それまでも菊池さんに御護りねがへれば此上なき事です」とある。藤村の葬式の時と同様に、島崎家の菊池に対する信頼を感じることでできる内容である。

2つ目は、昭和39年付の馬籠の末木利一からの

書簡である<sup>(31)</sup>。菊池が馬籠を紹介する『藤村記念堂由来記抄』を執筆したことは既に触れた。この書簡は『藤村記念堂由来記抄』の発行部数や出版経費などについて打ち合わせる内容となっている。

末木利一からの書簡はこの一通しか現存していないが、『木曾馬籠』や菊池の日記から頻りに連絡を取り合っていたことが窺える。

3つ目は、写真である。菊池は馬籠を文章に残すだけでなく、写真として残すことにも力を注いだ。『木曾馬籠』にはふるさと友の会の発会式の写真や、建築途中の藤村記念堂の写真などを随所に掲載している。そうした写真は、「定本 木曾馬籠 特にふるさと友の会員による藤村記念堂建築写真 附〈新建築〉誌」として、アルバムに収められている<sup>(32)</sup>。

その他、菊池が撮影したものを含めて、約70点ばかり馬籠など木曾路を映した写真が残っている。

## 謝辞

本稿において調査対象とした菊池重三郎関係資料は、菊池なつみ氏の御厚意によって、大磯町郷土資料館に御寄託いただいている資料である。改めて記して感謝申し上げる。

## 注

- (1) 菊池重三郎『馬籠 藤村先生のふるさと』(東京出版株式会社、1946年) p.26、以下『馬籠』と略す。
- (2) 『馬籠』 p.31
- (3) 『馬籠』 p.56
- (4) 現地案内板にて確認
- (5) 『馬籠』 p.122-125
- (6) 昭和18年10月10日付菊池重三郎差出はがき(菊池重三郎関係資料 1-250-4)
- (7) 『馬籠』 p.313
- (8) 「なつみへ(第四信)昭和二十年四月十四日(土)夜」(菊池重三郎関係資料 1-176)
- (9) 「なつみへ(第七信)昭和二十年五月三日(木)夜記」(同 1-176)
- (10) 昭和21年2月6日付野田宇太郎差出書簡(同 1-128-3)
- (11) 昭和21年1月10日付野田宇太郎差出書簡(同 1-128-2)
- (12) 昭和21年11月15日付野田宇太郎差出書簡(同 1-128-7)
- (13) 昭和22年1月16日付野田宇太郎差出書簡(同 1-128-4)
- (14) 昭和21年8月17日付鈴木保徳差出はがき(同 1-91-4)

- (15) 昭和21年12月16日付曾宮一念差出はがき(同1-43-17)
- (16) 馬籠本陣跡設計図(同1-255～1-259)
- (17) 昭和21年9月23日付谷口吉郎差出書簡(同1-217)
- (18) 菊池重三郎『木曾馬籠 島崎藤村の故郷』(小山書店、1958年) p.76、以下、『木曾馬籠』と略す。
- (19) 藤村記念郷編『藤村記念館五十年誌』、p.76-77
- (20) 藤村記念事業 ふるさと友の会発起人名簿(菊池重三郎関係資料1-214)
- (21) 有島生馬「馬籠まつり」(同1-243)。『木曾馬籠』中の記載箇所はp.191-194である。
- (22) 昭和26年2月5日付島崎楠雄差出書簡(同1-198)
- (23) 木曾馬籠原稿(同1-36～39)原稿は4分割されているため、資料番号も4つに分かれている。
- (24) 菊池重三郎日記 昭和33～34年(同1-284)
- (25) 『木曾馬籠』p.223-227
- (26) 獅子文六「序」(『木曾馬籠』の序文)(菊池重三郎関係資料1-245)
- (27) 昭和34年1月6日付谷口吉郎差出書簡(同1-193-3)
- (28) 鈴木昇・佐川和裕編『叙情の人・菊池重三郎—よせられた書簡を中心に—』(大磯町郷土資料館、1989年) p.5
- (29) 昭和53年4月、馬籠での写真(菊池重三郎関係資料2-35-6)
- (30) (昭和、年不詳)8月1日付島崎静子差出書簡(同1-82-2)
- (31) 昭和39年8月22日付末木利一差出書簡(同1-125)
- (32) 「定本 木曾馬籠 特にふるさと友の会員による藤村記念堂建築写真 附〈新建築〉誌」(同2-21)

#### 参考文献

- ・菊池重三郎『馬籠 藤村先生のふるさと』東京出版社、1946年
- ・菊池重三郎『木曾馬籠 島崎藤村の故郷』小山書店、1958年
- ・鈴木昇・佐川和裕編『叙情の人・菊池重三郎—よせられた書簡を中心に—』大磯町郷土資料館、1989年
- ・藤村記念郷編集委員会編『藤村記念郷三十年誌』藤村記念郷、1979年
- ・藤村記念郷編『藤村記念館五十年誌』藤村記念郷、1997年
- ・藤村記念館編『図録 島崎藤村』藤村記念館、2009年